「いわての復興教育推進事業（震災学習列車活用スクール）」成果報告書

学校名：洋野町立帯島小学校

Ⅰ　事業の概要（地域の実情含む）

本校は太平洋側の隆起による海成段丘（大野段丘）の上に立つ中山間地域にあり、海岸線から約３０ｋｍほど内陸部に位置する。この立地環境により東日本大震災では津波等の影響はなく、人的被害は町内の他の地区同様なかった。

復興教育に関しては、各学年、年間計画に基づいて副読本を活用した学習を行う以外、３月１１日には追悼の想いを共有しあうこと、未来に向けて教訓を生かすことを目的に全校集会を行っている。

Ⅱ　取組の概要

１　震災学習列車活用スクールについて

ア　ねらい

震災学習列車に乗車し、被災地の現状を直接見たり復興への思いを聞いたりしながら、東日本大震災の理解を深めるとともに被災地の今や自分たちの防災を考える機会とする。また、学校周辺には裏山や川があり、台風により土砂崩れや洪水も懸念される。自然災害に対する現実的な問題として子どもたちの防災意識を高めていく。

イ　活動日程（９月３０日）

○学校から久慈駅まで貸し切りバスで移動。
○久慈駅から震災学習列車に乗り田野畑駅まで移動（車窓から見学）。
○田野畑駅で下車。「大津波語り部&ガイド」
○バスで普代村（黒崎灯台）に移動。昼食。
○バスで移動。普代水門見学。
○バスで学校へ移動。

ウ　活動内容（令和元年９月３０日）

【列車内から黙とうをささげる子どもたち】

本校の１年生から４年生までの児童４７名と引率の職員８名が、北リアス線を利用し、久慈駅から田野畑駅まで復興列車に乗車した。列車内では三陸鉄道の職員の方から、東日本大震災当日の三陸鉄道の様子、海沿いの町に暮らす人々の様子、復旧に向けた願いや努力などのお話を聞いた。

田野畑駅で下車すると、二つのグループに分かれてＮＰＯ法人　体験村・たのはたの大津波語り部のみなさんに案内していただき現地見学を行った。子どもたちは地震や波による被害の様子、住民の避難の様子、そして震災後の復旧状況を実際に見たり聞いたりすることができた。震災によって大きな被害があったにもかかわらず、津波の体験を後世に伝えていこうとする方々から、多くの教訓を学ぶ機会となった。

【語り部の方から震災前の町の様子の話を聞いた】

田野畑からはバスで普代村に移動した。東日本大震災では大津波で壊滅的な被害を受けた三陸沿岸の中で、普代村は高さ１５ｍを超える巨大防潮堤と水門で守られた。報道資料によると、行方不明者は１人出ているものの、死亡者はゼロ。住宅への浸水被害も出ていないとのことである。４年生児童は普代村が水門や防潮堤で守られたことを事前に学習していたが現地では１５ｍ 以上の高さの水門を見上げた子どもたちはその高さに驚いた。そして、実際にはその高さをこえて津波が押し寄せたことを知り、あらためて巨大津波のおそろしさを実感した。

水門近くには普代水門によって救われた村民が元村長和村幸得の先見性に感謝して建立した顕彰碑が建っている。子どもたちの顕彰碑に書かれている説明を読み、「二度あったことは、三度あってはならない」という和村氏の強い信念を知った。明治三陸津波、昭和三陸津波と、二度の大災害で甚大な被害が出ている普代村の村民を救うため、和村元村長の津波防災にかける情熱を感じたようである。

２　震災学習列車活用スクールに関連した学習

ア　事前学習について

事前学習としては、主に「いわての復興教育

プログラム」における教育的価値「いきる」「かかわる」「そなえる」を踏まえた副読本を活用した。具体的な資料は以下のとおりである。

【１～３年生】

いきる　…「自然とともに」

かかわる…「今回の震災で感じたこと」

「四つの教え」

「防潮堤を見て学ぶ～宮古市田老～」

そなえる…「2011（平成23年）３月11日

東日本大震災

【４年生】

いきる　…「三陸鉄道のたたかい」

「多くの命を救った防災無線

かかわる…「地域のみんなで助け合う」

「未来のために－5つの提言」

そなえる…「2011（平成23年）３月11日

東日本大震災

「津波のしくみと被害」

４年生については、総合的な学習の時間を活用して参考図書で三陸鉄道の復興について学習した。具体的には、『きずなを結ぶ震災学習列車－三陸鉄道、未来へ』という本を読みあった。子どもたちが印象に残ったところを紹介しあうことで、地震と津波で受けた被害の様子や復興していく被災地の様子を知ることができた。また、そして、被災した人たちの思いや願いのため三陸鉄道が果たした役割も感じることができた。

イ　事後学習について

震災学習列車活用スクールに参加した１年生～４年生すべてが、事後学習として学習したことを作文や日記にまとめた。上学年は特に、単なる感想ではなく復興教育の一環としてこれからの自分の生き方を考えられるように、今回学習したことを今後どのような場面でどのように生かしていくかといった視点で記述させるようにした。特に４年生においては、しおりに記入したメモや当日のビデオ映像で体験したことを振り返ったり、上記の本で紹介されていたことで確かめたことを紹介しあったりした。各自が記入したしおりや感想用紙はポートフォリオとして保存し、今後の復興教育の学習にも生かしていきたいと考える。

本校では２月上旬にわくわく発表会という行事が行われ、３年生以上が総合的な学習の時間に学習したことを発表する。４年生は今回の震災学習列車活用スクールで学習したこともグループごとに保護者の方の前で発表する予定である。今回の体験で得たこと、考えたことを保護者にも伝え、家族でも今後の防災について意識が高まることを願っている。

事後学習を生かすという点では、大野地区の副校長会が中心となり、今回の震災学習列車活用スクールで各校が学習したことを交流が挙げられる。この「小小連携」を通して他校の実践の様子を知ることができた。

模造紙に活動や学習の様子の写真や子どもたちの感想が紹介されていて、自分たちの活動と比較したり、今まで気づかなかったことを知る機会ともなった。

Ⅲ　取組の成果と課題

１　成果

（１）　内陸部に位置する本校の子どもたちが震災学習列車を活用して沿岸地域の被災地の復興の様子を知ることができた。復興教育の一環として活用している副読本とも関連し、実感を伴って「いきる」「かかわる」「そなえる」の教育的価値を学ぶことができた。

（２）　昨年の１０月、台風１９号の影響で三陸鉄道が運休となってしまった。震災学習列車活用スクールに参加した児童は三陸鉄道に対する関心も高く、自分たちに何かできないかと考え、保護者にもよびかけ校内で募金活動を行った。１２月下旬、集められた募金を３年生の代表者が三陸鉄道（久慈駅）に届け、１日も早い復旧を願った。子どもたちの言動から災害にあった人や場所を思いやる心が高まってきた。

２　課題

（１）　学習列車活用スクールでは、現地見学や体験活動を通して子どもたちの防災意識を高めることができた。本校の児童は内陸部に暮らすため津波に対する意識は低い傾向があるが、今後、震災津波アーカイブ等を有効活用して復興教育の充実を図っていく必要がある。

（２）　震災学習列車に乗って被災地の復興の様子を直接見たり聞いたりしたことは子どもたちにとって貴重な体験となった。今回の活動や取組を子どもたちの「思考力・判断力・表現力」を高める工夫や配慮は不十分であった。